

# 月刊 JMITU ティニコカ



「被爆 50 周年記念事業碑」

9 月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部  
セガ グループ分会 2025 年発行

No.489

# セガ 休職関連規定の改定

9月12日セガ社人事部より、「休職関連規定の改定」についての説明がありました。  
10月1日より休職についての以下改定を行いたい。

## 改定の目的

- ・十分な休養・療養期間を設定し、再発による再休職を防止する。
- ・用途が限られ、等級による格差の大きい傷病有給制度は廃止し、より利便性の高い保存有給休暇制度を拡張する。

## 改善内容

- ・休職期間の上限を1年から1年6カ月にする。
- ・休養発令期間を三カ月から一カ月に短縮し、十分な療養期間を確保し万全の状態でする。

務に復帰できる。

- ・復帰後、通常勤務を開始してから6カ月後、同一・類似理由で新たに休職できるルールの廃止。
- ・同一・類似理由傷病による休職は通算して1年6カ月。

- ・等級による差の大きい傷病有給制度は廃止、一律75日を上限に保存有給を積み立てられる。一〇月一日時点で在籍の対象者には、60日を一律付与し、取得しない限りは消滅しない。

## 保存有給の取得ルール変更

### 業務外傷病（変更）

- ・連続して四日間以上出勤せず、かつ一週間を超える療養を要する旨の医師の診断

する旨の医師の診断

### 子の看護等（変更）

- ・子の看護休暇の取得日数と同一診断書、それに準ずる書類

### 介護（変更）

- ・介護休暇の取得日数と同じ

### 本人の不妊治療（変更なし）

- ・診断書、それに準ずる書類

### 短期の育児（変更）

- ・当該休暇期間が20日未満の場合

### 性同一障害に関する治療（変更）

- ・診断書、それに準ずる書類

### 指定感染症（新設）

- ・診断書、それに準ずる書類

### 疾病治療（新設）

- ・悪性新生物（がん）、特定疾患治療研究対象疾患（難病）、その他前各号に準ずると会社が認めたもの 主治医意見書

等により必要と認めた期間

### その他会社が取得を認めた場合

## GLTD

### （団体長期障害所得補償保険）

を会社で負担提供。

- ・傷病休暇中の所得減額分をカバー 標準月額額の30%、18カ月後を過ぎ傷病手当金終了後も標準月額額の30%を60歳まで補償。
- ・加入時期は最速で2026年4月、保証開始は2027年4月
- ・精神疾患に関しては特約により補償付与、補償期間は最長24カ月。

2025年休職の理由で、一番多いのが、職場のストレスや人間関係が主因、精神疾患（うつ病・適応障害）などです。治療を終えても再発や慢性化の可能性のある病気です。本当に通算して1年6カ月でいいものなのでしょうか？

## 掌編小説

## 推 測

仙洞田一彦

ここは、たすけあいの団体だ。困っている人がいると聞けば、そこに駆けつける。事務所に待機しているのは三、四人から五、六人。本来の手助けで出掛けている人は勿論あるが、本人の用事もあれば、高齢だから通院もあり、全員がそろうのは珍しい。

事務所は元自動車修理工場だったらしい。板壁でトタン屋根。廃業で壊すところだったが、団体の事務所に貸してくれた。コンクリート床だったが、床板も張ってくれた。今日は週末の金曜日、ニュース発行日だ。会員に配る定期発行のニュースで、加入を

呼びかけようとか、あっちの手助け、こっちの手助けの応援に駆けつけようという内容だ。

午後二時ごろ、ほぼ常連の四人がいた。ニュースはA3裏表印刷。

ソッセンさんの書いた記事はある。ソッセンは苗字ではない。ここにいる誰かがつけた渾名だ。とにかくパッパッと「率先」して仕事するからだ。手助けで駆けつけるのも早い。年齢は七十代後半。行動を反映していて、頭はつやつやしていて光沢がいい。歩くのも早いし、気も早い。

私が行った時、ソッセンさんはニュース原稿を書き終え、すでに調理に取り掛かっていた。週末はニュース作成後、「今週も、ご苦労さん」の意

味も込めて一杯やる。そのつまみを作っているのだ。

「ガンさん、ガンさん、ちょっと来て」

事務所の奥にある炊事場からソッセンさんの声がした。ガンさんというのは七十になったかどうかの年齢で、ここにいるメンバーの中では一番若い方だ。ガンさんと呼ばれるように、肩幅と言い、胴回りという、頑丈そうな体つきをしていた。その筋肉質を表すような半袖Tシャツを着ていた。ガンさんはパソコンに向かって、誰かの原稿を入力しているようだった。

「ガンさん」

また、さっきよりでかいソッセンさんの声がした。

「はあい」

ソッセンさんのせつつくよ

うな声に、ガンさんはゆっくり返事をして、ゆっくり立ち上がり、奥の炊事場に行った。ソッセンさんがガンさんに何か言っている。ガンさんは戻ってくると、またパソコンの前に座った。沈黙のままであるし、表情も立って行った時と変わっていない。初めてここに来た人なら、「急げ、急げ、早くしろ」というようなソッセンさんの声に、悠揚迫らざるガンさんの応対ぶり、この会話のギャップに驚くかもしれない。

私は勝手に推測した。おそらくソッセンさんは途中で、どこかに出かけるのだろう。無論、応援、手助けの用ではあるだろう。だから調理の続きを頼んだに違いない。どうして自分で最後までやらない

んだろう。出掛けるなら調理しなければいいと、ガンさんは心の中でつぶやいているかもしれない。いや、私の心の中がつぶやいた。出掛けるなら初めから調理しなければいい。ガンさんではなく私がそう思った。

大きいテーブルの、私の隣りに座った——いや順番で正しく言うと、先にジンさんが座っていた、その隣に私が腰かけたのだ。

ジンさんが「うーん」とうなり声を出した。ジンさんはガンさんより少し歳が上で、ソッセンさんよりは下ではないかと思う。ジンさんは女性にもてるらしい。私はそういうところを目撃したことがないので本人の言い分を聞かない。男と女では見る目も、

感受性も違うのだろうと思う。ジンさんを見ていてそう思う。ジンさんはソッセンさんの原稿を読んでいる。手には赤のボールペンを持っている。ソッセンさんの原稿の推敲、校正をしているのだ。

「うーん」

ジンさんが、またうなった。

ジンさんは「ソッセンさんは、なぜこんな中途半端な記事しか書けないんだ」と思っているに違いない。赤ペンの入れようがないのだろう。間違ひ字を直せば済むというものではない。ソッセンさんが何を書きたいのか。そこから考えなければならぬのだ。ソッセンさんは炊事場にいるのだから、分からなかったら聞けばいいのだが聞かない。ということ、聞いてもしよ

うがないとジンさんは思っているのかもしれない。いやジンさんでなく、私がかつてに推測した。調理する暇があったら、原稿の推敲をした方がいい。ジンさんはそう思ったかもしれない。いや、ジンさんがそう思ったかもしれないと私が思った。

「うーん」

ジンさんは、またうなったが、うなりつつ、ボールペンで何やら書き込んでいる。

午後四時ごろになった。ソッセンさんは炊事場から事務所の方へ急ぎ足で来た。

「ガンさん、頼むよ。じゃ行ってきます」

「行つてらっしゃい」

みんなが答えた。誰かが「帰つてくるの」と聞くと「いや」とソッセンさんは否定した。

シオルダーバッグを斜にかけたソッセンさんはドアの向こうに、言葉と共に姿を消した。

一時間ばかりでニュースは印刷も、封筒詰めも完了した。恒例のご苦労さん会だ。ジンさんは真つ先に冷蔵庫に向かった。ソッセンさんが、毎週、差し入れてくれる酒の一升瓶を取りに行ったのだ。

酔いが回ってきたら、差し入れてくれたソッセンさんのことなんか忘れていく。

来週も飲みたければ、ソッセンさんには何も言わない方がいいとジンさんも、ガンさんも思っているだろう。いや二人がそう思っているだろうと私が推測した。

注いでもらおうと、私は空いたグラスをガンさんの前に差し出した。